The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ソーシャルメディア利用とコミュニケーション : 架空のアプリを用いたワークショップの実施記録
Author(s)	若林, 魁人; 大澤, 康太郎
Citation	ELSI NOTE. 2025, 61, p. 1-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102764
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学 社会技術共創研究センター
Research Center on Ethical, Legal and Social Issues

ELSI NOTE No.61

2025 年 9 月 19 日

ソーシャルメディア利用とコミュニケーション：架空のアプリを用いたワークショップの実施記録

Authors

若林 魁人　大阪大学 社会技術共創研究センター　特任研究員（2025年8月現在）

大澤 康太郎　名古屋大学 大学院環境学研究科　博士後期課程（2025年8月現在）

※　本稿の作成は、公益財団法人トヨタ財団 特定課題プログラム「先端技術と共創する新たな人間社会」「ソーシャルメディア空間がもたらす“かかわりの全体性”の希薄化に関する研究」（研究代表者：若林魁人）の一環として行った。

大阪大学

ELSI

目次

はじめに **3**

1. 開催概要 **5**

2. ワークショップの設計 **6**

2.1. 架空の SNS の設計と疑似体験 8

2.2. 「参加者同士が問いかけ合う」を目指す対話の進行 12

3. ワークショップの記録 **15**

3.1. 架空の SNS アプリを用いたワーク 15

3.2. 全体ディスカッションの記録 30

4. おわりに **54**

謝辞 **55**

はじめに

ソーシャルメディア、特にソーシャルネットワーキングサービス（SNS）[1]は、人々の情報行動やコミュニケーションにも大きな役割を持つようになった。一方でソーシャルメディアが人々に提供した「情報選択の自由」や AI を用いたレコメンド機能は、自分と似た意見だけが存在する、いわゆるエコーチェンバー内でのコミュニケーションや、アルゴリズムによって自分が見たい情報だけがレコメンド表示されることによるフィルターバブル現象によって、人々の分断や情報の偏向の課題ももたらしている[2]。この課題について、例えばメディアリテラシー教育は対応策になるかもしれない。しかし、情報を疑うスキルが更なる分断を生み出しうるなど逆効果に働くケースも指摘されており、ユーザーのリテラシーや利用法に責任を単純化することは困難である。そのため、それぞれのユーザーが置かれている社会背景を踏まえた議論が必要であることが指摘されている（耳塚、2020）[3]。さらにオンライン空間で生じた分断によって「見たいものだけを見る」「つながりたい他者とだけ関係性を構築できる」という価値観が人々に定着することで、オフライン空間も含めた社会全体の分断・個別化の一因となる可能性も考えられる。これらの背景から、例えば米国ではソーシャルメディア事業者にアルゴリズムの情報開示やレコメンド機能を利用しない自由の提供を義務付けるフィルターバブル透明性法案（Filter Bubble Transparency Act）[4]が検討されるなど、ソーシャルメディアやその関連技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）についての議論が活発となっている。一方で先行する多くの議論は対立的・論争的話題における情報や意見の分断に着目されることも多く、ソーシャルメディアが潜在的に人々の価値観やコミュニケーション様式に与える影響についてはさらに議論される必要がある。

---

[1] ソーシャルメディアは飲食店のレビューサイトなども含めてユーザーによる情報の相互発信を行うメディア全般を、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）はソーシャルメディアのうちユーザー同士の関係性の形成やコミュニケーションを主目的としたメディアを指す。本稿では具体的なアプリケーション群を意図して“SNS アプリ”とする場合を除いて表記をソーシャルメディアに統一した。また、ワークショップの記録では実際の発言での語をそのまま残した。

[2] e.g., Cinelli, Matteo, et al (2021). "The echo chamber effect on social media." Proceedings of the National Academy of Sciences 118.9: e2023301118.

[3] 耳塚佳代（2020）.“「フェイクニュース」 時代におけるメディアリテラシー教育のあり方”.『社会情報学』8(3), pp.29-45.

[4] これは John Thune 上院議員を中心に 2019 年に提出された法案であり、2021 年 6 月に同議員らが主導して再度の法案提出、それに付随する形で 11 月に超党派のグループが法案を提出した。2023 年 7 月には米国上院通商科学運輸委員会で可決され、国議会での可決を今後目指す。ここで可決された法案は、一定以上の規模のインターネットプラットフォーム事業者に対して、アルゴリズムの使用状況の開示と表示最適化のオンオフの切り替えの権利の提供を義務付け、その要件を満たさない事業を違法として連邦取引委員会（FTC）が民事罰を求める権限を与えるものである。

参考：Igor Bonifacic. “Bipartisan bill seeks to curb recommendation algorithms”. TechCrunch. (2021.11.10).

https://techcrunch.com/2021/11/09/bipartisan-bill-seeks-to-curb-recommendation-algorithms/

John Thune . “Thune’s Big Tech Algorithm Transparency Bill Unanimously Approved by Commerce Committee”. (2023.7.27).

https://www.thune.senate.gov/public/index.cfm/2023/7/thune-s-big-tech-algorithm-transparency-bill-unanimously-approved-by-commerce-committee

この問題意識から筆者らは、特にオンラインコミュニケーションに親しんでおり影響を受けていると考えられるデジタルネイティブ世代の若者がオンライン・オフライン空間でどのように、どのような他者とのコミュニケーションを行っているのか、生活の文脈に着目して調査することが有用と考え、これまで高校生を対象としたインタビュー調査を実施してきた。なお実施したインタビューのうち一部の記録は ELSI NOTE「ソーシャルメディア利用とコミュニケーション：高校生へのインタビュー記録」として公開されている[5]。これらのインタビュー調査を通して、筆者らは当初の問題意識であった、ソーシャルメディアにおける「見たいものだけを見る」「つながりたい他者とだけ関係性を構築できる」という価値観がもたらす社会の分断・個別化について新たな示唆を得た。たとえば、インタニュー対象者らはソーシャルメディアの特性に無意識に取り込まれるのでなく、オンラインコミュニケーションが持つ他者の社会的背景や文脈が断片化されてしまう特性に自覚的であった。これは、高校生らの年長世代がソーシャルメディア上で行ってきた論争や“炎上”の事例、その背景にあるコンテクストの崩壊[6]などに触れることで得られた学習であり、それらの学習に基づいて、「複雑な」話題や振る舞いが予期せず断片化して他者と接続されることへのリスクを重く捉えていることが示唆された。それに伴って、深い関係性を構築した他者とそうでない他者とのコミュニケーションツールや振る舞いの“使い分け”に関する言及も多く見られた。

これらの調査結果を通して筆者らは、オンライン空間で見知らぬ他者とかかわることのリスクの側面が強調されがちであるが、高校生らは既にそれらのリスクに適応した上での新たな使い方を考え始めており、それに伴って新しい価値とリスクが潜在的に生まれているのではないかと考えている。そこで筆者らは上述した“使い分け”を読み解くことが、高校生らのソーシャルメディア利用や、そこにある潜在的な価値やリスクに関する理解を深めることにつながると考えた。

以上の背景より、筆者らは高校生らとともに“架空の SNS アプリ”の利用を題材としてワークショップを実施した。これは、どのような他者とオンライン上でつながり、その関係性に応じてどのように機能や振る舞いを使い分けるのかについて、それぞれの実際のソーシャルメディア利用をデモンストレーションした上で、その際の自分や他の参加者らの行為について対話を通して解釈することで、高校生らのコミュニケーションにおける価値観、その中でのソーシャルメディアの影響を考察することを目指したものである。本稿では実践報告として、このワークショップの

---

[5] 若林魁人, and 大澤康太郎. "ソーシャルメディア利用とコミュニケーション:高校生へのインタビュー記録." ELSI NOTE 53 (2025): 1-28. https://doi.org/10.18910/100134

[6] 本来は異なる場や人間関係ごとに分かれていた社会的な文脈が、1 つのオンライン空間に重なってしまうこと。
Marwick, A. E., & Boyd, D. (2011). I tweet honestly, I tweet passionately: Twitter users, context collapse, and the imagined audience. New media & society, 13(1), 114-133. https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/1461444810365313

実施内容と発言内容を記録する。なお、得られた対話に関する分析については別稿にて報告する。

本稿で参考にした文献等は全て脚注に記した。ウェブサイトについては 2025 年 7 月下旬の時点でアクセスを確認しており、今後アクセスできなくなる可能性があることを付記する。

1. 開催概要

ワークショップは 2025 年 6 月 27 日の 13 時から 15 時にわたり、都内私立高校内の教室にて行われた。会場および参加者は筆者らとネットワークのある都内私立男子高校の教員の協力を得て募集され、教員の授業に参加する生徒、および授業のチューター（サポート役）の大学生が参加した（表 1）。高校生らは中学 1 年生の頃から面識があり、教員の授業を受講した時点で親交のある生徒同士であった。

日時：2025 年 6 月 27 日 13：00～15：00

会場：都内私立高校

ファシリテーター：若林、大澤

オブザーバー：教員 2 名、トヨタ財団関係者 2 名

参加者	性別	学年	ワーク中のユーザー名
A	女性	大学 2 年	tomtom
B	男性	大学 2 年	紫キャベ太郎
C	男性	高校 3 年	ねぎねぎ
D	男性	高校 3 年	Ryotin_21
E	男性	高校 3 年	〔本名〕
F	男性	高校 3 年	〔本名〕

表 1　参加者一覧

参加者らには口頭と紙面、および参加者のうち高校生の保護者には紙面で、研究の目的と方法、いつでも研究参加の取り消しの権利があること、個人が特定される情報の匿名化、成績評価には影響しないこと、データの保管や研究終了後のデータの廃棄について説明し、調査対象者本人と保護者の同意を得た。ワークショップ中の発言内容や様子、および後述のワークショップで利用したアプリケーションへの入力内容は参加者らの同意を得た上で記録を行った。

2. ワークショップの設計

これまで筆者らが行なった高校生へのインタビュー調査では、彼ら・彼女らはオンラインコミュニケーションにおける社会的背景の欠落や変質に無自覚に取り込まれるのでなく、むしろ深い関係性を構築した他者とそうでない他者とのコミュニケーションツールや振る舞いの“使い分け”を行っていることへの言及が多く見られた。一方で、これまでの経験についてのインタビュー調査で得られる語りは、インタビュワーが問いかけうる質問の範囲でインタビュイーが語りうる範囲のことに留まってしまう[7]。そこで、実際にソーシャルメディアを利用する際の他者とのつながり方をその場で疑似的に再現し、その行為について参加者らとともに観察して考察することから、無意識に持っているそれぞれの他者とのつながりに関する価値観を考えることを目指してワークショップ形式での対話実践を実施した。

加えて、ワークショップの形式で当事者同士の行為やその背景の価値観を見比べることは、当然と考えていた自身の行為や価値観を相対化して探究することにもつながる。例えばこれまで筆者らが実施したインタビュー調査では「LINE は個人情報に近い感覚があるから、それほど親しくない人とは Instagram の DM で連絡する」という人から「相手が誰であってもメッセージは全て LINE でやり取りしたい」という人まで、多様な用法や文脈がインタビューの中で語られた。そこで、それぞれが意識的・無意識に行っているコミュニケーションの使い分けを見比べて、コミュニケーションにおける自分の価値観を相対化して内省することから、高校生らのオンライン・オフラインでの振る舞いの個人差と同時に、根底で共通した価値基軸を記述することができると考えた。

以上の背景より、ワークショップは架空の SNS アプリを用いてオンライン上での他者とのつながり方を考えるワークの時間と、参加者全体での対話の時間から構成された。ワークショップ全

[7] 例えば野村（2017）では、それゆえにグループワークでの参加者間の主体的な語りの相互作用を通して、調査者にとって未知の語りを得られることを指摘している。
野村康. (2017). “社会科学の考え方: 認識論, リサーチ・デザイン, 手法”.

体の流れと各パートの概要を表 2 に示す。対話の時間は休憩を挟んで前半と後半に分け、前半ではそれぞれの架空の SNS アプリを用いたワーク内容の共有とその比較から自身のオンラインコミュニケーション観を考え、後半ではオンライン・オフラインを横断するコミュニケーション全般のあり方について語るという流れで進行した。

所要時間	内容	ねらい
15 分	架空の SNS（2.1 節）を用いてフォロー/フォロワー関係を記述	「自分はどのような人々とでつながっておく必要があると考えているか」を再現する
40 分	お互いの「オンラインコミュニケーション観」を紹介	参加者同士の問いかけを通じて、ソーシャルメディアに関する「実は異なる用法や意味づけをしていること」を捉える
10 分	休憩	
55 分	オンライン・オフライン上での他者との「出会い」や「関係の継続」について対話	オンライン上での他者とのつながりや関わり方から発展し、オンライン・オフラインのコミュニケーション全般の生起や変質を考える

表 2　ワークショップの進行

図 1　ワークショップ中の様子

2.1. 架空の SNS の設計と疑似体験

まず、オンライン上でどのような人と・どのような機能や距離感で関わっているかを疑似的に再現する体験を行うために、ワークショップの舞台設定として「来週から LINE などのメッセージアプリを含めた既存の全ての SNS アプリが使えなくなるので、新しい 1 つの SNS に全員で移行しなければならない」という状況のもと、筆者らが用意した架空の SNS アプリに現在の SNS アプリでのつながりを移行する必要があるという導入を考えた。もちろん実際のオンライン上での他者とのつながりやコミュニケーションは、プラットフォームの機能によるアフォーダンスやユーザー間の規範に応じて、同じ人でもプラットフォームごとに異なる振る舞いを示す[8]。しかし「自分はどのような人々とオンライン上でつながっておく必要があるか」の最大公約数を考えるという問いの設計であればSNSアプリの“使い分け”に関する議論はある程度避けられると考え、今回は現在行なっている全ての SNS アプリでのつながりを一箇所に集約するという舞台設定によって、論点を「生活全体のなかで、他者との出会いやかかわりにソーシャルメディアがどのように寄与するか」に絞ることを目指した。

用意した架空の SNS アプリの画面を図 2 - 図 3 に示す。暫定的に「アプリ」と呼称したが、インストールの手続きの簡略化のため各画面は Web ページとして用意し、参加者ら・教員の了承のもと、配布したQRコードから各参加者のスマートフォンでアクセスすることで体験を行った。この SNS アプリには各ユーザーとのメッセージ機能や通話機能、および Instagram に類似したストーリー投稿機能[9]が実装されるという設定とした。

---

[8] プラットフォームによるアフォーダンスに関する議論は盛んに行われており、例えば DeVito & Hancock（2017）ではソーシャルメディアの投稿への反応の可視性などの機能差がユーザーの発信やデジタルアイデンティティの形成にどのように影響するかを論じている。DeVito, M. A., Birnholtz, J., & Hancock, J. T. (2017, February). Platforms, people, and perception: Using affordances to understand self-presentation on social media. In Proceedings of the 2017 ACM conference on computer supported cooperative work and social computing (pp. 740-754).

[9] 短めの動画や画像をスライドショーのように投稿できる機能。投稿後 24 時間で自動的に削除されることに特徴がある。また、誰でも閲覧できる投稿と、ユーザー自身が設定した「親しい友達」のみが閲覧できる投稿を使い分けることができる。

Web ページへアクセスするとアカウント作成画面（図 2 左）が開かれ、図 2 のそれぞれの画面で参加者らは「名前」「パスワード」「ユーザー名」「プロフィール画像」「自己紹介」「興味のあるトピック」の情報を設定した。「名前」「パスワード」（図 2 左）は体験に没入感をもたらすため実際の SNS アプリを模して設定し、入力された情報の記録は行わなかった。「ユーザー名」「プロフィール画像」「自己紹介」（図 2 中央）の入力内容は、対話を行う際にそれぞれの参加者の入力内容を比較するために記録した。「興味のあるトピック」（図 1 右）の入力内容は後述の「フォローの予約」の画面（図 4）でレコメンドされるユーザーの属性と連携するために利用した。

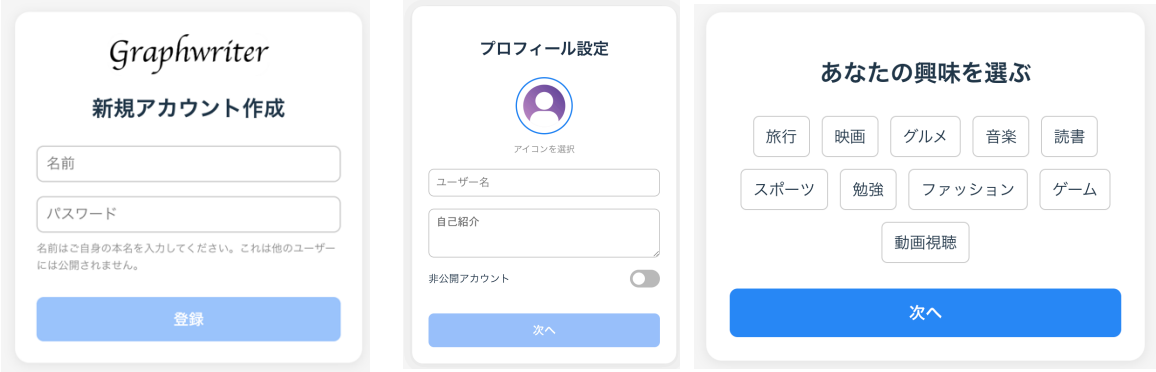

図 2　ワークショップで用いた架空の SNS アプリのうち、アカウント作成画面（左）、プロフィール設定画面（中央）、トピックのレコメンド設定画面（右）。それぞれ情報を入力することで、左、中央、右の順番で画面が遷移する。

図 3　ワークショップで用いた架空のアプリの待機画面

図 4 にフォロー予約画面を示す。ここでは「自分はどのような人々と SNS でつながっておく必要があるか」およびそれぞれの人とどのような機能を使いたい・使われたくないかを再現することを目的とした UI を用意した。この UI について、以下の教示を行った。

1. 自分を中心とした円（図 4 左）にはさまざまな属性のユーザーのアイコンが表示される
2. 各アイコンはスワイプで移動させることができ、フォロー提案したい・されたいユーザーほど円の内側に、さらに自分の「親しい友達」向けの投稿[10]を表示させたいユーザーは濃い円の内側に配置する
3. 円の外側に移動させたユーザーは自分にもレコメンド表示されず、相手にも自分はレコメンド表示されない
4. それぞれの属性のユーザーに対して、電話機能・ダイレクトメッセージ機能での連絡を許可するか設定できる（図 4 右）
5. 「クラスメイト」などの事前に用意した属性に限らず、自由入力形式でユーザーのアイコンを追加できる。入力内容は属性であっても特定の個人であってもよい。

[10] Instagram のストーリー投稿機能に同様のプライバシー機能が実装されており、筆者らのインタビュー調査では高校生にも広く利用されていることが分かった。

図 4　ワークショップで用いた架空のアプリのフォロー予約画面

特に 5.の項目について、それぞれの参加者の生活の文脈に応じた「他者とのつながり」は筆者らが事前に用意した項目や「クラスメイト」などの広い属性のみで表すことはできず、また実際のSNS利用ではオフラインでのアカウント交換や、既にそのプラットフォームを利用しているユーザーからの受動的なフォローなども行われている。そのため「この場の参加者がはじめてこのプラットフォームに参入したユーザーで、後から多くの人々が参入する」「自由入力内容を自然言語処理とユーザー情報との紐付けによって適切にレコメンド処理する」という架空のストーリーラインを提示することで、ワークショップとして可能な限り納得できる文脈で「SNS 上での他者とのつながり」を記述してもらうことを目指した。この UI 上での入力内容を、それぞれの参加者の入力内容を比較するために記録した。フォロー予約画面の入力を終えると待機画面（図 3）を表示した。

2.2. 「参加者同士が問いかけ合う」を目指す対話の進行

筆者らは過去に、参加者同士が問いかけあう過程を通じて考えを深めることに焦点を当てたワークショップを実施した[11]。例えば図 5 のような対話の場面は、それぞれが前提として「相手も同じものを思い浮かべている」と無意識に捉えている意味や解釈が、実は他者とは異なっていることを発見する場面である。このような異なる理解や解釈を交換し合う中で新しい気付きを得る対話を、ソーシャルメディア利用という「誰もが親しんでいるが実は異なる用法や意味づけをしているもの」をそれぞれの参加者が深く考えて語るための方法として取り入れることを考えた。

同じ揚げパン、思い浮かべてる?

6月に行なった気象WSで、こんな一幕がありました。自己紹介の一環で、好きな給食について話していた時のことです。

参加者A:私は揚げパンが好きです。

参加者B:私も!

大澤:二人とも、おんなじモノを思い浮かべてるかな?

参加者A:え、おんなじでしょ。だって揚げパンは揚げパンだもん!

大澤:本当に?じゃあさ、二人の揚げパンはどんな形をしているの?

参加者A:丸くて長細い形。(ジェスチャーを交えて)

大澤:コッペパンみたいな形だね。

参加者B:全然違った……私はこういう(ジェスチャーを交えて)、ねじねじの形!

図 5　筆者らが過去に行ったワークショップ「気象マスターをめざせ！～雲ができるしくみ～」での対話例。日本科学未来館 科学コミュニケーターブログ[11]より引用。

[11] 大澤 康太郎. “「説明しあう」を実践する、気象ワークショップの"準備"”. 日本科学未来館 科学コミュニケーターブログ. (2022.8.2). https://blog.miraikan.jst.go.jp/articles/20220802post-471.html

この目的を踏まえて、参加者全体での対話の前半では、2.1 節で示した架空の SNS アプリへの入力内容をスライドショーに投影することでシェアしながら、参加者同士での差異に着目した。以下に、ワークショップ中で行われた参加者同士のインタラクションの一例を抜粋する。

なお、以降の発言内容の記録について、括弧表記のうち（）は筆者による補足のための挿入を、〔〕は個人情報にかかわる箇所を改変した挿入をあらわす。また各発言については読みやすさを考慮し、文意を損ねない程度に「あのー」「えっと」等の発言を削除する、分量が長くなりすぎない形に省略する、などの編集を行っている。

プロフィール画面について

Ｂ：　〔高校名〕も書くんだ。

Ｅ：　俺、書いたよ。

Ｄ：　俺は書いてないけど。

若林：　やっぱり普段でも、（SNS のプロフィールに自分の高校や年齢を）書く人と、普段書かない人がいるんだ。

Ｃ：　年齢は書くかな、みたいな。

Ｅ：　書いてないよ、俺。

Ａ：　全然書いてないわ。

電話機能の許可について

若林：　家族とも電話しない？

Ｄ：　（中略）最低限の連絡が取れればいいかな、みたいな認識だったので。

若林：　じゃあ、高校とか、クラスの人とかとつながるのがメインみたいな感じ？

Ｄ：　はい。

Ｃ：　家族疎外され過ぎ。

Ｄ：　マジでそんな何もない時に連絡しないから。

Ｃ：　家族と？　へえー。

対話の後半では、

今まで関係なかった人（新しい友達？何か共通の趣味の人？）や出来事との「出会い」や「関係の継続」は、オンライン・オフライン上でどうやって生まれた？

という問いを導入として、各参加者の体験や実感をもとに、他者との関係性の構築や変遷と、その際のオンライン・オフラインでのコミュニケーションの自覚的・無自覚な使い分け、そもそも高校生自身は異質な他者との関係にどのような在り方を望んでいるのかを記述することを目指した。

この問いの設定にあたり、事前の想定として筆者らはこれまでのインタビュー調査などから、高校生らはオンライン上で

- 見ず知らずの匿名ユーザーなど「オフラインでの自分に無関係な他者」に、自身の社会的な文脈から切り離される形で予期せず接続されてしまうリスクを強く避けている
- 一方で、例えば同じ学校に通う面識のない人など「オフラインでかかわりはないが、オフラインでの自分の属性やアイデンティティに部分的に紐づいている他者」とつながることは積極的に行う
- 「親しい友人」と「面識はある程度の知人」などの間でも、親密さに応じてオンラインコミュニケーションで用いる機能を自覚的に切り替えており、またどのようなコミュニケーションが心地良いと感じるかも異なる

という、オフラインの自分との関係性の強弱に応じたいわば「親密さのグラデーション」に応じた“使い分け”があると仮定した。この仮定自体を（再解釈される可能性も含めて）検討するとともに、異質な他者との関係性の「生起」および、その他者との関係性がグラデーションの中での変化にオンラインプラットフォームの機能やオンラインコミュニケーションの特性がどのように寄与するかに着目した。

なお事前準備の時点では、これまで筆者らが行ったインタビュー調査の内容を元にして、関係性の生起や変化にソーシャルメディアやオンラインコミュニケーションが（ポジティブ・ネガティブな側面ともに）寄与した例のストーリーラインをいくつか用意していた。しかし実際のワーク前半で、参加者自身から個人的体験や論点が語られた。そこで例示は不要として、休憩時間に参加者それぞれの「オンラインコミュニケーション観」に関する機能・つながるユーザーの属性に関する共通点や差異が現れた箇所、参加者らの関心が向けられた論点を簡易に図式化した（3.2節 図 12）。

3. ワークショップの記録

本章では各参加者が行った体験ワークの入力内容と主要な発言、およびディスカッションパートでの対話を紹介・記録する。

3.1. 架空の SNS アプリを用いたワーク

本節では、疑似体験ワークの内容、筆者らが整理した各参加者の入力内容の概要とその際の代表的なやりとり、およびワーク内容の共有を受けての対話を紹介する。なお記載順は実際のワークショップでの発言順としている。

また、データの記録は画面遷移時に自動的に画面をキャプチャし、筆者らの用意したサーバへ画像を保存する形で行った。その際に一部端末では画面上の教示に関する文字表示や UI の色表示に不具合があったため、一部参加者の図表の表示が異なることを付記する。

3.1.1. 各参加者のワーク内容の共有

参加者 C

図 6　参加者 C の入力内容。プロフィール文章はプライバシー保護のため筆者らが編集した。

- プロフィールには年齢と高校名を書いて、非公開アカウントにはしない。
- 最もオンラインでの連絡を必要とするのは家族で、友人やクラスメイトはもう少しオンラインでのコミュニケーションの頻度や必要性が低い。
- 共通の趣味の人の中で、特に同じ野球チームを応援する人であればオフラインで関わりのないユーザーと関わりを持つことがある。そのような相手とは電話機能は必要ないが、DM は来てもよい。

関わりの頻度について

若林：　クラスメイトを（濃い円の）外側に置いたのはなんで？

Ｃ：　近すぎなくてもいいかな、みたいな。

若林：　じゃあ、一番、スマホでやりとりするのって、家族なんじゃないかっていう感じ？

Ｃ：　LINE は家族。インスタとかは友達。

若林：　ここで言うと、友達って入るとしたらどの辺に入ります？

Ｃ：　濃い青の外側。家族よりは外でもいいかな、みたいな感じで。

（中略）

若林：　巨人ファンって、同じ巨人ファンの（現実の）友達？　それともネット上の巨人ファン？

Ｃ：　ネット上の（知らない）巨人ファン。でも、通話は要らないので。

（中略）

若林：　ほかの、また別の趣味（のネット上の人のつながり）とかっていうのもあったりするのかな？

Ｃ：　これっていうのはそんなないかな。でも、そんな違う趣味の人は要らないかなみたいな。

（中略）

Ｅ：　ロッテファンどう？　ロッテファン。

C：　リーグが違うからなぁ。

大澤：　じゃあ、阪神ファンなら？

C：　阪神はちょっと（フォローしない）。

プロフィール画面について

B：　〔高校名〕、書くんだ。

E：　俺、書いたよ。

D：　書いてないけど。

若林：　やっぱり普段でも、（SNS のプロフィールに自分の高校や年齢を）書くでしょと、普段書かないでしょがある。

C：　年齢は書くかな、みたいな。

E：　書いてないよ、俺。

A：　全然書いてないわ。

参加者 A

図 7　参加者 A の入力内容

- アカウントは非公開にしている。
- 家族以外とはオンライン上で電話をしない
- 現実の自分とかかわりのない人と、オンライン上で接点を持たない

参加者 D

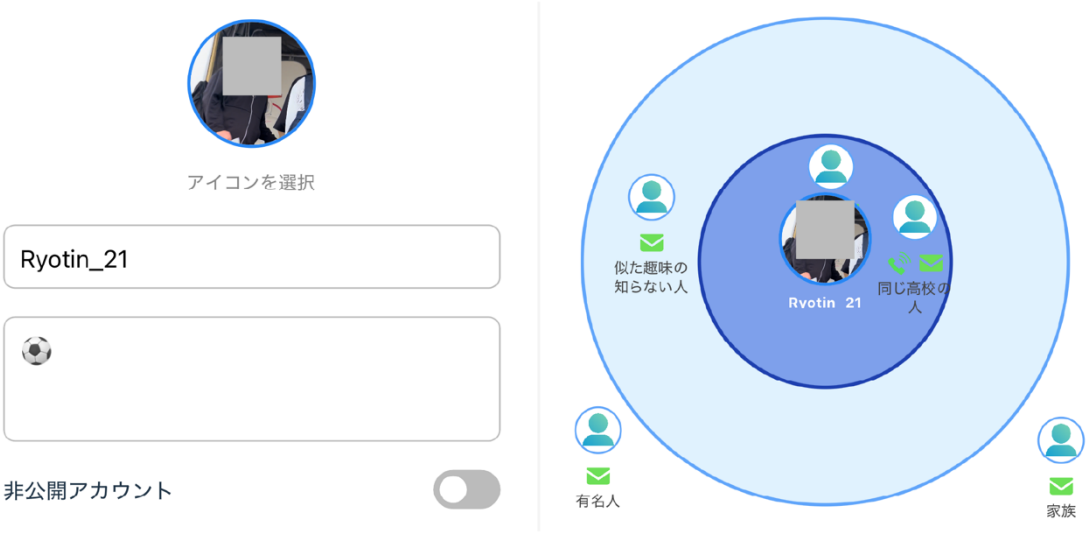

図 8　参加者 D の入力内容。アイコンの顔部分はプライバシー保護のため筆者らが編集した。

- 公開アカウントで SNS を利用している。ただし顔写真は自分自身のものではない。
- オンラインでやりとりする相手は主に友人で、家族とはほとんど連絡しない
- オフラインの知り合いに限らず、共通の趣味を持つユーザーとつながって、たまに DM で会話をすることもある

電話機能の許可について

若林：　家族とも電話しない？

Ｄ：　（中略）最低限の連絡が取れればいいかな、みたいな認識だったので。

若林：　じゃあ、高校とか、クラスの人とかとつながるのが主、メインみたいな感じ？

Ｄ：　はい。

Ｃ：　家族疎外され過ぎ。

Ｄ：　マジでそんな何もない時に連絡しないから。

Ｃ：　家族と？　へえー。

共通の趣味の知らないユーザーとのかかわりについて

若林：　趣味って、サッカー？

Ｄ：　サッカーですね。（中略）あとは、西武ライオンズですね。

若林：　（中略）同じ趣味界隈とかの人とのつながりは、それは（投稿を）見たりするぐらいなのか、それとも DM をしたり、リプライ飛ばしたり、みたいなこともするの？

Ｄ：　そういう分野で、趣味が合う人と話したらいいかなっていう感じで。

若林：　実際、話したりってします？

Ｄ：　たまに。

参加者 F

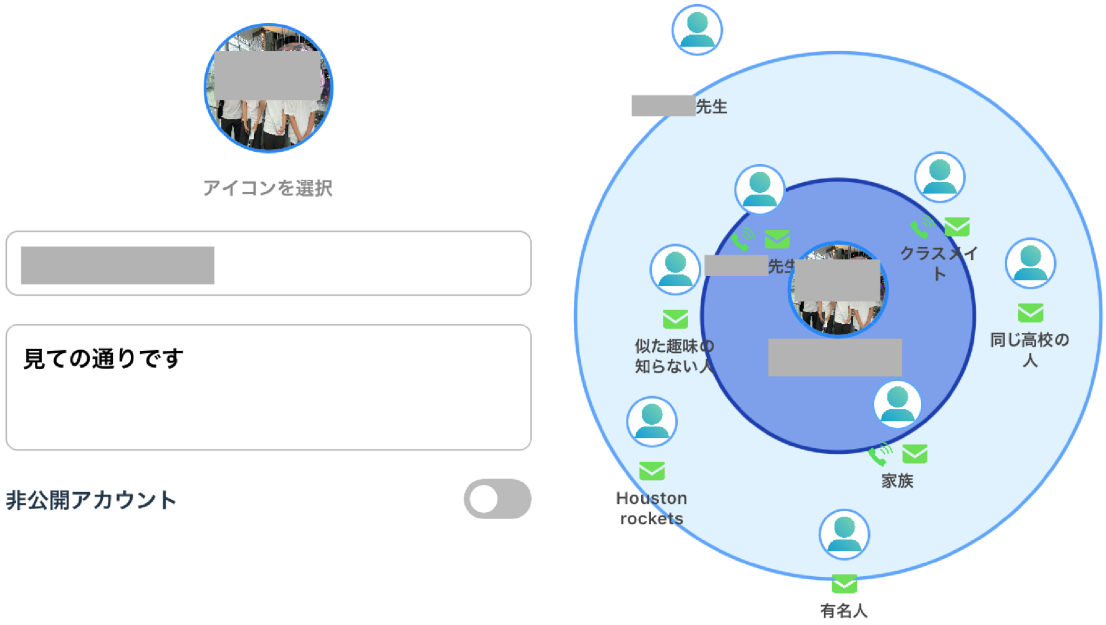

図 9　参加者 F の入力内容。アイコンの顔部分と入力内容の一部はプライバシー保護のため筆者らが編集した。

- 非公開アカウントに設定し、プロフィールに個人情報を載せないようにしている。
  ※ ワークの結果については以下の発言があった。
  F：さっき言った学校プロフィールに載せるのもそうなんですけど、公開アカも反対派なので、ミスです、これは。
- 最もオンライン上でやりとりする相手は家族や先生。
- 同じ高校の人とオンライン上でつながる文化があることは把握しているが、あまり乗り気ではない。しかし、完全に拒絶するほどではない。
- Instagram などで趣味の発信をしており、同じ活動をしているユーザーの投稿を閲覧したり交流したりしている。

関わりの頻度について

若林：　一番 SNS 上でやりとりするとしたら家族？

Ｆ：　LINE とかだと、そうですね。

（中略）

若林：　同じ高校の人というだけでつながることにはアンチ派だけど、でも、輪の中には入れる？

Ｆ：　あんまり近くに入れ過ぎると、今もテスト期間なのでそうなんですけど、ちょっとプリントくれない？みたいな、だるいのが多いので、あんまり近づけたくないなっていう。

若林：　でも、輪の外に出すほどじゃなかった？

Ｆ：　まあ仲間なので。

共通の趣味の知らないユーザーとのかかわりについて

若林：　同じ学校のロケッツ[12]ファンっていう意味じゃなくて、インスタとかでロケッツ好きな人、というか、選手？

Ｆ：　とか、選手とか、その球団自体のアカウントとか。

若林：　（バスケ以外だと）似た趣味の人はどういう人を想定してます？

Ｆ：　自分、音楽が好きなので、実際に音楽やってる人とか。

若林：　やってる人？

Ｆ：　想定してますね。（中略）個人で普通に音楽を演奏してる人とつながるイメージです。

若林：　やりとりしたりもします？

Ｆ：　しますね。実際に、前、ダンサーの方と、もしかしたらコラボできるかもね、みたいなお話もインスタでしたので。そういう一緒に演奏とか会話をやりとりする想定です。

---

[12] Houston Rockets。アメリカ合衆国テキサス州ヒューストンに本拠を置く NBA チーム。

参加者 E

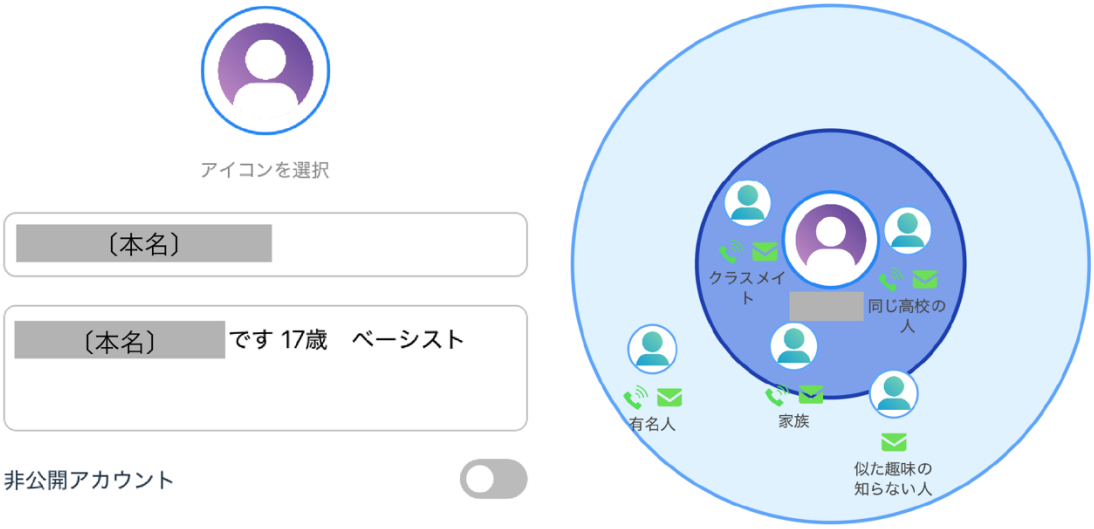

図 10　参加者 E の入力内容。入力内容の一部はプライバシー保護のため筆者らが編集した。また右図でのアイコン位置の移動・設定が実際のワークショップでは困難だったため、対話の中で語られた意図をもとに編集した。

- 基本的には同じ学校の人や家族とのコミュニケーションに用いる。
- 近い趣味や関心を持つ人を一方的に見ることはあるが、基本的にコミュニケーションは取らない。
- 趣味の中で、特に自分と同じ楽器をしている人についてはフォローして見るだけでなく、DM でコミュニケーションすることもある。

参加者 B

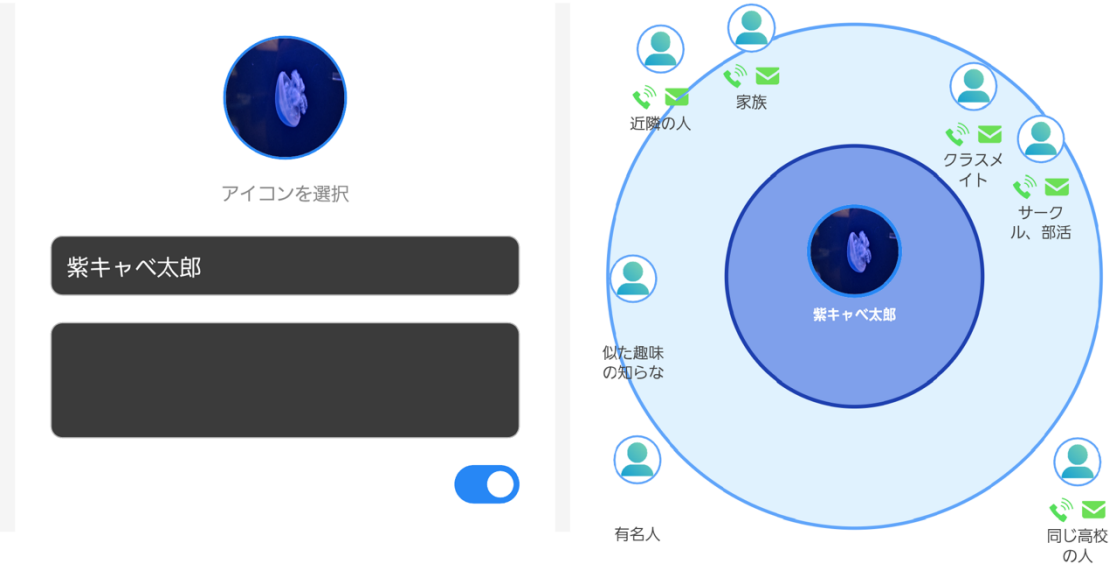

図 11　参加者 A の入力内容

- 基本的にソーシャルメディアで何かを発信することはない。
- オフラインでの関係性のある相手との連絡手段としてソーシャルメディアを利用しており、オンラインから新しい関係性を構築する機会はなかった。

3.1.2.　全員のワーク内容の共有を受けての対話

大澤：　みんなに聞いてみたいことが一個あったんですけど、何となくみんなの傾向として、円の真ん中に近い人と電話ができるっていうふうにしてたような気がするんだけど、それって逆の人もいるかなっていう感じがしてて。例えば僕が最近経験したことだと「信頼できない人とは電話でしか話さない。テキストって残っちゃうし、流出したりするかもしれないじゃん」みたいな人もいたりしたのよ。そういう感覚はあんまりない？

F：　言われてみればっていう。

B：　言われてみれば思ったけど。

大澤：　そういう悪意を目の前にすると、そうかもなっていう感じはするけど、基本的にはやっ

ぱりみんな親密な人とつながるためのツールとして電話っていうのは捉えてるのかな。電話する？　そもそも、普段。

C：　ほとんどしないです。

D：　あんまりしない。

E：　するくない？

D：　たまにします。

大澤：　でも、ゲーム界隈とかだと、通話つなぎながらゲームするとかやるんじゃないの？

F：　ゲームしない。

大澤：　俺もゲームしないけど、そんなに。若林さんはゲームする人なんだけど。

E：　昔やってたからそうだったんですけど、今はやってないから。だけど、バイトで家に帰る時とか、暇な時はD君に変な電話凸[13]したり。電話はするかな。ね、D君。

大澤：　それはやっぱりある程度、親密な人とつながるための電話ってこと？

E：　そうですね。

D：　俺はほぼしないのに。

大澤：　一貫して電話が（3.1.1節ワークの円の）真ん中寄り（の人に許可してる）っていうのが、ちょっと気になったなっていうのが一点。で、あとは、たぶん最初に書かれてたのが、家族と、友達と、趣味みたいな、そういうつながりだったけど、Twitterとか、実際に見てるとかなり偶発的につながるというか「なんでこの人フォローしたんだろう」みたいな人が出てきたりすることがあるかなと思って。そういう人たちは個別な判断になると思うんだけど、例えば僕で言うと、同じ地元の人は全然知らなくてもフォローが来るとか。本当に何の面識もないし、話も合わなそうなんだけど、フォローし合ってるみたいな。この後、たぶん親密さとフォロー関係みたいな話をちょっとずつしていくと思うんだけど、パッと思い付いたら「そういえば、あんな人フォローしてたな」みたいな、例外みたいなのを思い付いたらちょっと言ってほしいので、思い出しといてほしい

[13] 「電話で突撃する」を略したスラング。

かなという感じです。

教員：　質問。これ、グラフライターでしたっけ。

大澤：　グラフライター。

教員：　それがどういう SNS を意識してるかによって変わるかなと思って。いわゆる LINE みたいな直接のコミュニケーションを念頭に置いたものなのか、それとも例えばインスタみたいに何かの情報を、コミュニケーションっていうよりも情報を共有し合うことを目的につくられているものなのかによって変わってくるんじゃないかなと思うんだけど。

大澤：　じゃあ、ちょっとその点、聞いてみたいのが、今日の設定としては、全ての SNS がなくなって、グラフライターしか使えないっていう話だったじゃん。今、先生が言ったみたいに、LINE 的な SNS と、インスタ的な SNS と、あと X、Twitter 的なものとか、Facebook 的なものみたいなのがあると思うんだけど、何をイメージしましたか。

E：　LINE。

C：　インスタと LINE。

大澤：　じゃあ、インスタ的なものをイメージした人。

F：　どっちも。LINE とインスタ。

大澤：　やっぱり全部なくなっちゃうから。

F：　はい。併用して、みたいな。

大澤：　どっちかしかイメージしなかったっていう人もいる？

E：　LINE しか。

大澤：　LINE しか。A さんは。

A：　インスタだけ。

大澤：　インスタしか。グラフライターは、だって、フォントがもうほぼインスタみたいな感じだもんね。

A：　めっちゃインスタだと思って。

大澤：　B さんは。

Ｂ：　インスタ寄りの、でも、LINE っぽかったかも。

大澤：　でも、全部なくなるってなったら、LINE のほうがちょっと必需品っぽい感じもして、そっちをイメージするみたいなこともあるかもしれない。

教員：　そうそう。分かんない。僕、だから、LINE だったら家族とかと絶対つながってたいし、むしろLINEだったら別に趣味が合う人とかとはつながりたいとは思わないし。だけど、逆にインスタみたいなところだったら家族じゃなくて別にいいから、むしろ恥ずかしいかなっていうところもあって、そこが、だから、どうなのかなって思ったっていう話でした。

大澤：　たぶん今、確認したら、SNS が全部なくなるっていう舞台装置をちゃんと考えるなら、どっちの機能も何となく想定しながらやったっていうことだよね、大体の人は。で、LINE だけの人もいるし、インスタだけの人もいると。ありがとうございます。

Ａ：　インスタは投稿してないからな。

若林：　そもそも今の話を聞いてて、インスタ、普通に投稿に使ってる人ってあんまりいないかな。誰かとのやりとりとか、友達向けのストーリーじゃなくて、（知らない）誰かに向けた全世界発信みたいなことをする人いる？

Ｅ：　たまに。

Ｆ：　知り合いにしか。

Ｄ：　知り合い、基本、鍵アカなので。

若林：　基本、鍵アカ。そもそも投稿しない。

Ｂ：　あんまりしない。

若林：　結構、インスタの使い方、そんなにめっちゃみんなに見せる用じゃないよね。たぶん。

Ｅ：　そっちのほうがメイン。

若林：　わりと（Instagram は）知り合いとつながる用、LINE のもうちょっと柔らか版みたいな。そういう気がちょっとしてきました。今の話に関して。じゃあ、ちょっと全員載ってるかな。

（全員のワーク内容の一覧を画面に表示）

若林：　今、親しさみたいなことが軸になるのかなと思ったっていう話を大澤さんがしてくれていたと思うんですけれど、家族とのやりとりみたいなことを思った時に、例えば電話がやっぱり輪の（内側に置いた相手と使うし）、家族っていうのが輪の中に。E さんは来てない。でも、これは後からちょっと変えられるなら（家族とも通話機能は使いたい）っていう感じですよね。で、B さんは、通話使う相手でも、円の外に。

B：　円の外めだけど、通話はできたら、みたいな感じ。

若林：　D さんがそんなに（オンラインで通話もしないし、円の内側にも置いていない）。

C：　家族とは。

D：　そうです。

若林：　そもそも通話自体を使わないという感じなんですか。じゃあ、通話っていうものをどういう人とするのかっていうのを見ていきたいんだけど、じゃあ、通話にあえて外してる話で思うと、例えば F さん。通話を、例えば家族とクラスメイトだけに許可してる、通話を許可する、こういう人とだったら電話してもいいとか、逆にこんな人とは電話したくないみたいな、基準みたいなのって何か思い浮かびます？

F：　でも、基本的に知ってる人と、もう一回、面識がある人としかしたくないですね。あと、書き忘れたんですけど、結構、遠くに住んでる友達が、自分が多くて、福島だったり、大阪のほうだったり、そういう人とは結構な頻度で、もうチャットよりは電話のほうが何ならするかなっていう印象です。

若林：　チャットよりも電話のほうが多い？

F：　チャットよりも電話のほうがします。

若林：　今、これって感覚、みんな同じですか。これはチャットより電話のほうがするっていう。

C：　電話よりはチャット派。

F：　遠い人とか。

C：　遠い人、いないもん。

D：　遠い人だったら、Snapchat みたいな感じで、文章とか言葉よりは写真を送り合ったりみたいな感じ。こんなことしてるよ、みたいな感じのほうが多いかもしれないです。

E：　確かに。

D：　Snapchat やってない？

E：　いや、やってないけど、いとこが遠くに住んでて。LINE とか電話とかはしないですけど、インスタのそれこそストーリーで「何してるな」みたいなのは分かるので、会話しないっていうか、存在は知ってるというか。

若林：　存在は知ってる？

E：　つながろうとはしないんですけど、でも、分かるみたいな感じ。

若林：　今イメージしてる「遠くに住んでる友達」って、どのぐらいの友達？例えば昔、毎日近所で、公園でめっちゃ遊んでたみたいな友達のイメージですか。それとも昔いた学校のクラスメイトみたいな、何となく近況が分かればいいなみたいなイメージの友達ですか。今、描いてるのは。

F：　そう（なんとなく状況がわかればいい）ですね。

若林：　D さん、どう？

D：　仲良くて、遠くに引っ越しちゃったりとか、そういう感じの人。

E：　昔から定期的に会ってるっていう感じ。いとこなので。

B：　確かに。

若林：　結構親しくて物理的に距離が遠い、みたいな友達に「知ってる人だから電話していいじゃん」っていう話と、電話は何ならしないけどSnapchatみたいなものを送るみたいな。今、すごく仲いいけれども毎日会うみたいな人じゃない人とオンラインで関わる時（について）、2 通りの話が聞けたなと思うんですけれど、大体どっちかですか。

B：　そうですね。Snapchat に近いかもしれないですけど、チャットをちょっとやりとりするかもしれないな、ぐらいの。

若林：　今これ何の話を広げようとしているかというと、親しい人とコミュニケーションする時ほど電話とかを使って声でつながりたいっていう話と、別に親しかったら電話してもいいかははあんまり関係ないみたいなことがあり得るのかなと思ってるんですけれど。逆に例えば、やっぱり知らない巨人ファン（同じ趣味の人）から通話は来てほしくないとか。

C：　ちょっと厳しいかな。

Ｅ：　ちょっと厳しい。

若林：　今、一回会ったら電話かかってきてもいいよって話と、仲いいけど別に電話じゃなくてもよくない？っていう“仲いい人にとっての電話“っていう機能の話と別に、「知らないけど同じ趣味だから取りあえずオンライン上でつながってる人から電話来てもいい」っていう話って少なかったなっていう気が。

Ｂ：　電話のほうが無視しにくくて、関係ない人が話をした時に、チャットだったらわりと無視しやすいけど、電話だったら鳴りっぱなしだからちょっと嫌だなとは思うかも。

Ｅ：　それこそ電話だったら親しい人よりもさらに親しい人じゃないと、ちょっと自分は嫌だな。

Ａ：　相手の顔が見えないしね。

若林：　今、親しい人の中でもさらに親しい人しか、電話ではあえて関わりたくないっていうのは結構共通の感覚ですか。

Ｄ：　電話ってリアルタイムで時間が取られるっていうか、直接会話するから、やっぱりその時間は空けなきゃいけないし。それはわりと親しいっていうか、そういう間柄じゃないと、わりと避けちゃうことがある。

若林：　自分はちょっと違う派みたいな感覚（の人）って。

Ｆ：　自分は本当に仲いい人とは、もはやチャットも変換せずにオール平仮名で、もう雑に会話するみたいな感じなので。時間を取らないコミュニケーション、とにかく話したいから、みたいなので、電話とか本当に仲いい人は逆にしなくなるかもしれない。

Ｄ：　あとは、遠いから電話する。

Ｅ：　遠いから、そうそう。物理的に距離があるから、あと久しぶりに話すから電話。けど、普段話す、（物理的な距離が）近い人はもうチャットで、もうスパスパ話したいなっていうイメージです。

若林：　じゃあ、今、いったん折り返しの時間ぐらいなので。ここまでで話してもらったのは、オンラインの中での電話とかっていう機能と、仲いい人に「もはや逆に電話じゃなくてもいいじゃん」っていう話から「本当に仲いい人じゃないと電話の機能って使わないよね」みたいな。オンライン上での関わり方の機能と、今ある親しさの話みたいなのをしていただきました。

3.2. 全体ディスカッションの記録

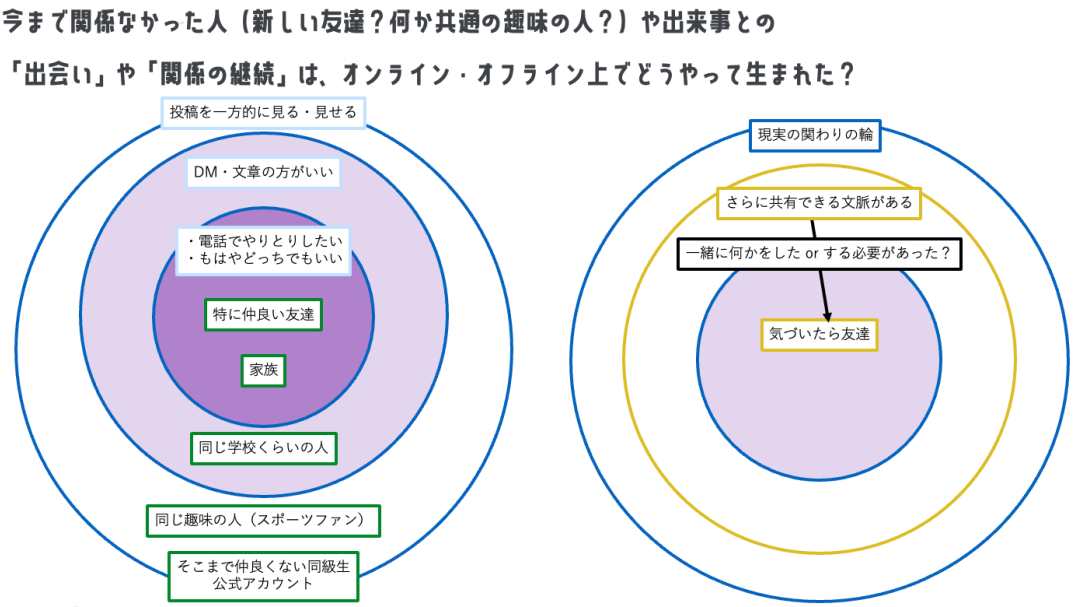

図 12　前半の対話を簡易に整理、画面に投影した図。なお本稿への掲載用に、ワークショップ中に作成・提示した実際の図からサイズなどを調整している。

若林：　さっき（図 12 の）真ん中の人とは親しい投稿とか電話を使うっていう話をしてたんですけど。真ん中に行くほど親しい人、もちろん“親しい人”は人によって違うということは前提にして。最後のほうの話は、何の縁もゆかりもない人とはそんなにやりとりはしないんだけれども、同じ趣味のファンの人とかだったら DM を使ったり。もっと親しい人とは電話してもいいし、逆に、もう本当に親しかったら電話をするとかじゃなくて、別にどっちでもよくなるじゃん、LINE とかも砕けていいじゃん、みたいな話だったのかなと思ってるんですけど。

一旦、もう一個外側の話として。有名人とか最たる例だと思うんですけど、別にやりとりはしないけど一方的に存在は知ってて、見るだけみたいな人ってどういう人がいますか？　さっき出てきた話だと同じ界隈の趣味の人とか。ロケッツのファンって、誰の話だっけ。

F：　あ。

若林：　そう、F さん。ロケッツのファンの人と別にしゃべったりはしない？

F：　しないです。

若林：　けど、お互いに投稿は見る、みたいな。僕も今この調査をやってる中で、例えば〔アイドルグループ〕のファン同士でお互いにフォローはしてて（投稿を）見るけど、だからといってしゃべったりはしないみたいな、そういうのもあるなっていう。そういうの、もある？

D：　若干、〔アイドルグループ〕のグループで言うと、あるかなって。

若林：　好き？

D：　〔グループ名〕。

E：　俺はやっぱり〔芸能人名〕だから。

若林：　そういう人って、同じ趣味の人以外に（いますか）。こういう人とそういう感じで、別にしゃべったりしないけど、お互いに見るだけ見てるな、みたいな人って。

D：　ファンのアカウントみたいなのがあるじゃないですか。ファンマーク[14]みたいな。そのアーティストの投稿とか（を受けて）「こういう活動をしててすごいな」みたいな投稿をしてるのを見たりして。そこから活動したり、そういうルートもあるので。本人じゃなくても。そういう面で見てるっていうのは結構。でも関わったりはしないので見てるだけ、そういうのはあるかなっていう。

B：　元同級生です。

若林：　元同級生。

B：　僕だったら。

E：　元同級生はたまに連絡するから。それこそさっき俺が言った、俺のいとことかが。

B：　（図 12 の）白枠？

E：　そう。白枠。

[14] 特定の人物やコンテンツのファンであることを示すために、SNS などのプロフィールに記載する固有の絵文字などの組み合わせ。

若林：　たまに DM とかもするっていう意味では。でも、基本は白みたいなイメージ？

Ｅ：　そうですね。マジでしないかな。

若林：　同級生、そうか。

Ｂ：　そこまで仲良くないというか、連絡しないけど、何やってんやろうな、みたいな。生きてるかな、ぐらいは白にいそう。

Ｆ：　これって人限定なんですか。

若林：　というと？

Ｆ：　例えば〔学校名〕のインスタとかは、DM は一切しないんですけど、投稿は見るんですね。

若林：　確かに。

Ｆ：　そういう公式なんちゃら系は基本、白なのかなって。

若林：　そうですね。確かに、確かに。Twitter だと企業が時々絡んできたりしますけど、確かに公式アカウントみたいなことは（ありそう）。逆にそういう人以外でやりとりするものってある？

Ｅ：　犬の情報。

Ｄ：　飼い主の方が犬を投稿してるってこと？

Ｅ：　そうかな。

大澤：　僕、自分のアカウントを見てみたら大島の高校をフォローしてて。なんでかっていうと、その高校は、僕、八丈島出身なんだけど、島に行く船が欠航しそうかどうかっていうのをツイートしてくれてるからフォローしてる。でも直接リプを飛ばしたりはしないけどめっちゃ検索して見る、みたいなのはあったかな。

若林：　やっぱりある種、一方的に見たり。

大澤：　そうね。そこの円の中に入ってる。

若林：　ありがとうございます。じゃあ、この図を書いて何がしたかったのかというと。今からちょっとみんなと一緒に考えたいことがあって。

（ここまでは）親しくなるにつれて、お互いに一方的に見てるぐらいのところから、テキストやりとりをしてたり、もっと言ったら、何となく電話も OK みたいになったり、あるいは電話っていうよりも何でもよくなるみたいな、親しさによって関わり方のグラデーションみたいなのがあるイメージなのかなと思ってます。

これは「“今”この人とはこんな親しさだからこんな風にやりとりする」っていう話だったんですけど、でも“今“仲いい人も初めは知らない人だしなと思った時に、じゃあ、今まで関係なかった、例えば新しい友達だとか、あるいは共通の趣味の人とか、あるいは人以外と、どうやって出会ったり、どうやって仲良くなっていったり、その関係を続けていったりっていうことを僕たちって暮らしの中でしてるのかなと。もっと言ったら、オンラインがあることでどう変わってるのかなっていうことを聞きたいんです。

例えば僕は今日やらせてもらってるこの調査の中で、こんなお話を聞いたことがあるんですよね。（そういうつながり方に）アンチ派の人もいるけど、同じ学校の人とプロフィールをきっかけにつながって、人によっては「フォローするけど別にしゃべらんな」「何となくフォローしただけで、インスタのストーリーを見てるだけ」みたいな人の話もあったし、逆に「同じ学校の人とつながって、文化祭で発表を見に行ってちょっとしゃべったりして、今も学校であいさつするようになった」みたいな人にも会ったことがあるんです。

これは、今まで全然知らなかった人との出会いっていうのがオンラインであって、かといって出会ったもののそれがさっきの図の真ん中のほうに行くためにオンラインは何にも関係なかったわっていう話もあれば、それがよかったっていう話もあったり。あるいは推し活みたいなお話をしてる時に、それは全然自分と同じ学校でもなければどこの誰かも分かんなかったような人と、ちょっとコラボカフェに一緒に行ったみたいな人もいる。でも逆に、まさにさっきあったロケッツとか、同じファンアカウントの推しマークとかの話みたいに、別に見てるだけみたいな話もあるっていう。

こういう、オンラインで出会った人と、そこから、オンラインじゃなくても、オフラインとかでも、人と仲良くなった時の SNS エピソードみたいなのを、僕が今言った話に似たようなこととか、むしろ全然自分だったら逆やねんけど、みたいなこととか、思い出すようなことありますか。

F： 一個あって、自分は去年ぐらいまでちょっと生徒会の外務活動をしてて、生徒会の団体ごとに公式アカウントとかがあるので、そういうのをフォローしてる人同士だと、お薦めにすごい出てくるんですよ。で、もう知らない人とも勝手にフォローが来たりして、ストーリーとかを見て、たまに、顔は見たことないけどオンラインで知り合って話す人

とかもいて。「今度、ここの交流会、行ってみない？」みたいな感じで、その後にオンラインで出会ってからオフラインで会うっていうこともたまにありました。

若林： それでつながろうと思ったのって、お薦め表示されて「この人のお薦めだったらフォローするか」みたいな、何でつながろうの判断をした？

Ｆ： 共通フォロワーで、この団体ってことは生徒会の関係の人なんだなとか、それこそ学校名を書いてる人だったら「この学校の生徒会の人なんだな」っていうのが分かるので、そしたらつながります。

若林： 知り合いであることが分かってる人の知り合いみたいな。

Ｆ： そうですね。

若林： 結構、うんうんっていう感じですか。

Ｂ： そんな感じがあるかな。

若林： 逆に、何も縁もゆかりもない人をフォローするパターンってあります？　滅多にないですか。

Ｅ： バイト先で知り合った人が同じ趣味を持ってて、それで（図 12）の真ん中に書いてることの逆みたいな感じで、オンラインで会って、その後ライブ行こうみたいな約束をした、みたいなのはある。それでインスタをフォローした時は、知り合ったからフォローするみたいな流れでフォローしたことはありました。

若林： 2 人が今話してくれたのは、オフラインの中の知り合いの知り合いみたいな関係があるから、それでオンラインでお薦めされて、つながって、関係がさっきの円の真ん中に寄っていくみたいなこともあるし、逆にオンラインで出会って、同じ趣味っていうのをきっかけに、オフの中でも（関係が円の真ん中に寄っていく）。

Ｅ： いや、オフで会って。

若林： そうか。バイトで出会って、（その後オンラインで親しくなるきっかけを得て）オフで出会った人は、SNS でつながってたからっていう。関係ない人と出会うきっかけって、趣味とかでっていうのもだし、知り合いの知り合いっていうのも面白いですね。

Ｃ： 知り合いの知り合いって自分はほとんどなくて、知ってる人オンリーみたいな。対面で出会った人とオンラインでつながっていく。知らない人とはもうほとんどつながってないっていう感じです。

若林：　それは今で言うと、学校とか、バイトとかの人。

C：　そうですね。

若林：　人と出会うタイミングって、バリエーションとして、例えば学校とか、アルバイトっていうところと、あるいはオンラインが何かを広げてくれるとしたら、そういう友達の友達みたいなことと、あともちろん前半の話でファンみたいな話があったと思うんですけど、ほかに思い浮かんだりしますか。こういうこと。

F：　本当に 1 年に 1 回ぐらいのペースでたまにインスタの動画にコメントするんですよ。適当な知らない人の。そうすると、それを見た関係ない、本当に知らない人からたまにフォローとか来たり、あと勉強のリール動画にいるコメント欄の人と実際、勉強を教え合って話したりっていうこともありました。

A：　しっかり SNS だね。

D：　というか、オンラインで約束することってある？

F：　何？

D：　オンラインで、例えば趣味が一緒で、それでどこか行こう、みたいになることってある？俺、全部オフラインだから一回もないから。

F：　会うはないな。

D：　ないよね。

F：　勉強を一緒に電話してする時はあるけど。

D：　マジ？　会うとかある？

C：　ないない。

D：　ないよね。ある？

E：　LINE のオープンチャットみたいなやつがあって、アニメとゲームみたいな（共通の趣味で）感じで集まってるところがあって。そこで個人的に仲良くなって、一緒にゲームしたりとかして、割と話すようになって Twitter を交換したり、「じゃあオフラインイベント行ってみない？」って感じで待ち合わせたり、みたいなことは。でも、そこまで行くのはマジでほとんどいないというか、今、1 人ぐらいしかいない。

でも、そういう例えばオープンチャットって分野が絞りやすい一つの例だと思うので、そういうところに行ってみて、知らない人と話してみる、みたいな感じで関係ができることはあるかなって。

若林：　結構みんな、へえっていう感じ？

Ｂ：　そんなこともあるのか、みたいな。

Ｄ：　長かった？　会うまで。

Ｅ：　中１ぐらいから今ぐらいまでだから。

若林：　チャットでやりとりをずっとしてて。

Ｅ：　そうですね。定期的に。

若林：　さっき、共通の趣味のファンと DM くらいは開けておく[15]みたいなのは何人かいたと思うんですけど、（E さんのように）結構やりとりすること、3 年続いたみたいな、何なら顔も属性も分かんない人との、友達としゃべるみたいな雑談の経験って出てきたりします？

教員：　今の中間みたいな感じなのかもしれないですけど、ゼミ生でいたのは、趣味のコミュニティですごく仲良くなって、彼は〔ハンドルネーム〕って呼ばれてるんですけど、そこからオフ会でみんなが会うようになって、それで定期的にずっと集まりが続いてる。でも、みんな彼の本名は知らないし、彼の本当の属性も知らないけれども、リアルで会ってるのが今でも続いてるっていう話を聞いたりしました。

大澤：　そんな話を聞くと、みんなはどう思う？　自分もそうやってみたいなと思うのか、ちょっと怖いなと思うのか。

Ｄ：　本名は知らないで、みたいな？

教員：　そうそう。本名は知らない。

Ｄ：　でも、自分はないけど、プロゲーミングチームとかはそういう感じなんじゃないかなと

[15] ダイレクトメッセージの送受信を許可すること。

思った。

大澤：　そういうコミュニティがあるということは想像できるってことだね。

若林：　さっきのお話的には、それはお互いもう素性は知ってるんですか？

Ｅ：　いや、もう結構、素性は知ってるぐらいです、お互いに。

若林：　今の大澤さんが言ったことの繰り返しかもしれないけど、仲良くなりたいって思います？

Ｆ：　それこそさっき言った、勉強のリール動画で知り合って、そこからお互いフォローして、DM で高１の冬くらいから話してる人は、沖縄に住んでて、距離が遠いんですけど、たまに東京に来る時は遊ぼうねっていう話はしてて。まだ来てないですけど、もしかしたら来たら遊びに行くかもしれない。

若林：　どうですか。別に、今、仲良くなりたいっていうほうの話をしてくれたんですけど、そうでもなかったりする？

Ｂ：　僕はそこまで思ったことはないですけど、めちゃくちゃコアな趣味があったりとかすると、近くにそれが好きな人がいなかったりすると、よりその気持ちは膨らむのかなっていう気はします。さっきの野球好きとかだったりしたらローカルで会えるかもしれないけど、特定のこのジャンルが好きです、すごいコアで周りにいません、みたいな時だったら、ちょっと近づきたいなって思ったりするかもなっていう気はしました。

若林：　逆に A さんはさっき出していただいた図（図 **7**）だったら、小中高大と家族の人とつながる SNS っていう感じだったと思うんですけど、やっぱりそういうイメージ？

Ａ：　知らない人とは別につながろうと思わないから、基本、オフラインで知ってる人。友達の友達でもお互いに存在は知ってる人だったらいいけど、みたいな。

若林：　お互いに友達の友達の存在は知る状況って、人づてに「こういう友達がいて」みたいなのを聞く、みたいな？

Ａ：　それで会ったことあるとか。

若林：　（C さんは）結構近い？　さっきの話だと、知り合いの知り合いとかは別に（つながりたいとは思わない）っていう感じ？

Ｃ：　本当に会ったこともないし顔も見たことない人だったら、つながってても知らない人だしな、みたいな。知っても得るものがないっていうか、どうでもいいかな、みたいな感

じで、つながろうとはしないかな。

若林：　今、知らない人との（オンラインでの）つながり方のパターンとして「共通のコアな趣味」っていうのと「知り合いの知り合い」っていうのがある。でも、それはつながる意味って何？っていうことから、それでつながってみて「もしかしたら沖縄から来るかもしれない」っていうこともあったと思うんですけど。ちなみに、同じ高校のしゃべったことない人をフォローするカルチャーに、それは嫌だな派と、それでもつながる派が序盤はいた気がするんですけど、誰が同じ学校の人とつながるみたいな話をしてくれたんでしたっけ。

Ａ：　同じ学校の人とつながる？

若林：　同じ学校なのはプロフィールで分かるからとりあえずフォローはするカルチャーについて、やるっていう派の人と、いや、それはめっちゃ嫌いっていう話が前半にあって。

Ｆ：　それでつながるのはいいんですけど、なんちゃら高校って学校名をプロフィールに書くのが嫌いなんです。ただ、それが嫌っていうだけで。

Ｅ：　それだけ？

Ｆ：　それだけです。

若林：　みんなつながるのはつながる、でも。

Ｅ：　別にいいかな。

Ｃ：　学年が同じだったらいけるかな。

Ｅ：　確かに。知らんとな。

Ｆ：　人数も多くないし、中高一貫なので大体みんな分かるんですよ。だから、あんまり学校内で知らない人っていうのがない。

Ｅ：　確かに。

若林：　そうか。

Ｅ：　いるかな。知らない人。

若林：　知らない人がいない？　もしかして。

D：　名前くらいは。

C：　名前と顔は分かる。

D：　もう一致してる。

若林：　今何を思ってるかっていうと、別にしゃべったことないけど同じ学校（の人とつながる）って、さっきは「同じ学校」っていう話ではなかったけど、つながって何になるねんっていう見方も一個あるのかなと思ったんです。そういう意味で、知ってるけどしゃべらない人と取りあえずつながってる、みたいなことって起きます？

A：　つながって何になるねんで言うと、同じ高校とかだと、それぞれの、例えば得意分野があって、その人が今後何かで成功した時に、私はその動向が知りたいから、取りあえずその人のその後の人生を知るためにフォローする。私はその結果、今すごくなってる人が（フォローしてる人に）います。そういう時のためにつながりを持つ。

B：　成功者を見たい。

若林：　さっきのイメージで言うと、別にお互いにしゃべったりするわけじゃないけれども、見るために（フォローしてる）っていう人が。

A：　見るために。自分は何もしないけど、見るために。

若林：　どうですか。今の皆さんの話を聞いてると、もうみんな顔と名前ぐらいは覚えてるのかもしれないけど、顔と名前は覚えてて、全員しゃべったことあるような感じなんですか。

D：　そんなことは。

C：　全員ではないけど。

D：　人によると思います。

C：　ほとんどは。

D：　あんまりしゃべったことない人いるかな。

若林：　あんまりしゃべったことないけど、つながってはいるな、みたいな。今の「何のために」はさておいて、見ることはする、みたいなことって起きます？

D：　インスタだったらアカウント 2 つ持ってたりして、1 個は同じ学校とかだったらいいかなみたいな感じで、それこそ学校の人が何してるのか見たりとか。もう 1 個は普段から

しゃべる人に絞って。そういう、アカウントでちょっと使い方を分ける感じかな。

F：　一緒です。

若林：　アカウント、サブアカと本アカを分けてっていうやつですよね。ちなみに、みんなそうですか。

C：　いや、アカウント１個。

E：　片方オープンなんだよね。だけど、たぶんメインで動かしてるほうが、俺、クローズドなんですよ。鍵アカ。

C：　見る専的な感じ？

E：　そう。もう片方は、サブアカのほうがオープン。

C：　よく投稿したりして。

E：　そうそう。

C：　そういうイメージだ。自分も。

E：　あと、何だろう。F が言ったように、友達の友達で、自分がそんな話してない人からフォローが来たら、俺は感覚的に乗りで押しちゃうみたいな。同じ学校じゃん、まあいいやって。

C：　それは確かにある。

E：　知らないっていう属性がないから。同じ学校という属性があるみたいな。

D：　共通のフォローがいたら、別にいいかなって。

C：　そうだね。共通のフォロワー。

E：　ちょっと見るけど、さすがに。誰だっけ、みたいな。

若林：　そこから仲良くなった、みたいなことって起きますか。

E：　ない。ないな。

B：　前、同じ団体に所属してた人から、共通の出来事か何かがあって「あの時の誰々ですよね」みたいな感じでつながって。今まで名前すら把握してなかった人について、相手の

名前は分かった、こういうのが好きなんだ、ってことはあったんですけど、でも 1 年間ぐらいそれからやりとりはないので、継続はなかったなっていう気はしますね。

若林： 取りあえず、別に断る理由もないしなっていう感じでつながって、そういう事件があったらちょっとやりとりはするけど、そこからそれをきっかけに仲良くなった、みたいなことはなかなか起きづらいのかなっていうような気がするんです。

じゃあ、すごく聞き方が難しいんですけど、今「この人とはサブアカでつながるし、雑に LINE したり、電話したりもできるな」みたいな人、初めに（3.1.1 節で）真ん中のほうに置いてもらったような人と、なんで仲良くなったんだろう、仲良くなる時ってどういうのが、みたいなことって（思い出せますか）。

E： オンラインじゃなくて。

若林： じゃないですよね。

C： オフラインだよね。

E： 俺、D となんで仲良くなったかもしらんもん。

D： ひでえ。

E： いや、マジで。オンラインで俺はそういうことはないから全部オフラインなんですけど、でも仲良くなった人の、なんで仲良くなった理由は覚えてないです。

C： 覚えてないけど、オフライン。

E： ファーストインプレッション的な、出会った時のことは覚えてるんですけど、その過程が思い出せないっていうか。

若林： それってちなみに、4 人ってこの（今回協力を得た教員の）授業で初対面ではない。

E： 高 1 ぐらいから知ってるかな。たぶん。

C： うん。俺、高 1。

F： C って中 1。

C： 中 1。ここは中 1 で、中 2。同じコミュニティにいて仲良くなって、みたいなのが多いかな。

若林：　そうですよね。たぶん同じクラス？

F：　いえ、全然。

E：　〔クラスの組 1〕だったな、みたいな。違う。

F：　おまえ、〔クラスの組 2〕だよね。

D：　〔クラスの組 2〕。

F：　〔クラスの組 2〕ですよね。

E：　F がこいつのことを変なあだ名を付けて暴れてたから、それで C のことだけは知ってた。D もそんな感じ。中 3 の時に、最後の最後、3 月ぐらいに顔を。

D：　それはたぶん俺が E としゃべってて。

E：　だよね。その時に目と目が合って、こんにちはした。でも、高 1 でようやく同じクラスになったから、なんで仲良くなったかは覚えてないけど、仲いいよな。

D：　お、おう。

E：　お、おう。

大澤：　ちょっと抽象的な聞き方になったんだけど、新しい出会いみたいなものをみんながどれくらい価値付けているのかっていうのを聞いてみたいと思って。もっと新しい人とどんどん出会いたいって思う人もいれば、そうじゃない人もいるでしょ。みんなの中だと、オンラインでとか、そういうことも関係なく、今、どういう感覚でいるのかって。

E：　今、ここだとそんなに無いけど、バイトとか、やんなきゃいけない感じの時は、全員と話せるようになっておきたいなっていう。だから、新しい人と仲良くなろうとする価値は結構高い。

大澤：　今の話だと、たぶん必要が先だっていうことだよね。必要があって、だから、そういう人たちとは出会える、みたいな。

E：　そうですね。だから、何かのグループを頼りにしてるかも。きっかけっていうよりは場所かな。

若林：　もうちょっといい？　さっきのバイト先で出会った共通の趣味の人って、それもバイトのコミュニティの人？　お客さん？

Ｅ：　バイトのコミュニティですね。従業員、スタッフか。スタッフの。

若林：　どうだろう。今の、同じ感じですか。「同じコミュニティの中で」っていうのが必要か、それともさっきの勉強のリール動画とかっていうのは、またコミュニティとはちょっと違うのかなと思ったんだけど。でも、それも同じ仲間だからっていう感じなのか。

Ｄ：　それはたまたまっていう感じなんですけど、あんまり、何の制限もなく新しい人と出会うっていうことは、あんまり自分は価値を置いてなくて。けど、最近新しい友達が増えてて、それは〔学校に関連した取り組み〕だったりは、そういう理由が先にありますね。新しい出会いを求めるのには。ただ単に新しい人との出会いっていうのはあんまり重んじてない気がします。

Ｂ：　確かにそれは。

若林：　というのは。

Ｄ：　Ｆと一緒なのは、あんまり新しい友達と無理に付き合おうとかは思わないので、そんな無理にコミュニケーションするくらいだったらあんまり話さない。本当にしゃべってて、「この人、同じ趣味を持ってるな」って思ったら話し始める、みたいな感じで。新しくどんどん（つながりを）増やそう、みたいに求めてる感じではないかなっていう。

若林：　どうですか。

Ｃ：　自分は新しい友達をつくろうっていうよりは、必要なコミュニケーションっていうか。名前言って、趣味言って、みたいな中で自然と仲良くなっていく。意図して新しい友達ができていくんじゃなくて、気付いたら仲良くなってたみたいな、そういうのが多いかな。

Ａ：　気付いたら仲良くなるか。

Ｅ：　たぶんそうやろ。学校の中だと。

Ｆ：　学校の中はそういうもんだよね。

Ｃ：　気付いたら仲いいみたいな。

若林：　こういう、現実のコミュニティの中に、場合によってはそれは必要不可欠かもしれないそもそも関係があって、その中で例えば趣味だったり、もしくは別にそこに理由なんかなく関係がずっとあって仲良くなるみたいなのが、さっきの大澤さんが言ってた新しい友達、出会いみたいなことなのかなという話かなと思うんです。

ここで、じゃあさっきの「ファン同士でつながる」みたいな時に求めてるのって、誰かとの出会いとはもしかしてちょっとイメージが違う？　それとも「いや、それも出会いだ」って思います？　なんでかっていうと、別に友達をつくろうとかじゃなくて、たまたま現実の中で人と出会うのが誰かとのつながりをつくることなんじゃないかって言ってたと思うんですけど、ところが結構ここの中には同じ趣味の人を実は探しに行くタイミングもあるのかなと思って。でも、今の新しい人とのつながりとはちょっと違うものって感じます？

F：　みんなあれじゃない？　SNS を使うっていうことを意識したら「じゃあ、趣味の人とつながりたいな」って、今改めて SNS を見つめ直してるからそう思ってるだけで、実際、そんなことしてなくない？

D：　どちらかというと、自然と流れてくるから見る、みたいな感じではあるかな。だから、SNS で、例えば同じ趣味を持ってる人とつながりに行こうとするとしたら、やっぱりさっき B さんが言ってた、自分の周りにそういうコミュニティがない、そういう限定的なものだった時に、情報共有したいなって思ったら行くかもしれないかなって。さっきのオープンチャットの話もわりとそういう感じだったので。

若林：　同じ学校の中どころか、もしかしたら周りを見ても、よっぽどこの話題を共有できる人がいない、みたいな話があったらそういうことも起き得るみたいなことなのかな。でも、〔アイドルグループ〕って結構、（オフラインでも）ファンが多そうな気はする。

B：　確かに。

D：　でも、それはわりと周りの影響というか。親が大ファンで、親の友達もファンで、それこそちっちゃい時に家で流れてる曲といえば〔アイドルグループ〕みたいな。だから、もう流れたら歌詞が出てくるくらい、気付いたら好きになってて。

若林：　確かに世代とか、みんなが学校で共通で知ってるもの、みたいなのとは違うものを共有したいと思ったら（オープンチャットに参加したりする）。

B：　言えるか言えないかとかもありそうですね。趣味だけど、言いたくない趣味。

A：　言いたくない趣味？

D：　〔アイドルグループ〕も、だって、あんまり言わないですね。

B：　だよね。

E：　D、カラオケ行く時、歌ってよ、次。

D：　嫌です。

E：　マジか。

若林：　実はさっきの“SNS で同じ趣味の人とつながる“って、つながるというより流れてくるのを見たいとか、場合によっては「現実のこの輪の中ではその話をすることはないな」っていう時に、しゃべりたいなと思うようなことがあるみたいなイメージ？　違う経験があるかも、みたいなことでも、おおむねそうかもっていうことでも。

B：　そうかも。

F：　2 択じゃない？　偶然か、リアルから理由があってかの 2 択でしか考えられない。

B：　でも、一緒にやらないと。一緒に何かをやった時に、ようやく相手を認識できるんですよ、僕。だから同じクラスにいても、一緒にやることないと、高校の時もあんまり名前を覚えてなかった。

F：　確かに。関わりないもんね、いるだけで。

若林：　確かにこの場も、授業で一緒にとか。

B：　そうですね。授業で一緒にやったりとか、サークルでも部活でも何でもいいんですけど、一緒に何かしたっていう経験があると、ちょっと仲良くなったりとか、それこそさっきの「知っておきたいな」じゃないけど、その後どうなったんだろうっていうのが気になったりはするかもだけど。僕はそんなに一緒にやった経験がない人だと、そもそも意識すらしないかも。

若林：　うんっていう感じ？

D：　確かにそうかな。

F：　じゃないと分かんない。

D：　学級委員。学級委員で中 1 からずっと一緒にやってて、それこそ一緒にご飯食べに言ったりとか、そういうのを繰り返して。

F：　打ち上げで、とか。基本、自分の親しい友達とか、サブアカを通すっていうのはほとんど学級委員の子が一番関わってる。

D：　文化祭実行委員で一緒にやってたとか。

大澤：　ちょっと思考実験的な、仮想の話になるかもしれないけど。みんなが高校を卒業して、もっと広い集団の中に入っていった時には、今は学級委員っていうつながりがより親密なつながりになってるけど、ただ同じ高校を出てるだけでも、すごくつながりを感じる属性になるかもしれないじゃん。そこら辺の感覚、たぶん今は高校の中でより相対的に、よりつながってる人とそうじゃない人ってあるかもしれないけど、全然関係ない大学に行って同じ高校の関係者を見たらすごい親近感を感じると思うんだよね、みんな。

だから、いま現実世界でもクラスの中での話をしてたけど、SNS の時ってまた違うじゃん。自分の集団が。そういうことをもう一回考えてみると、今の考えがどう変わるか、あるいは変わらないか、みたいなのをちょっと考えてみてほしい。SNS の中だと自分はどういう集団を想定して、どれくらい近い人、どれくらい遠い人、みたいなので考えてるか、みたいな。ちょっと質問が難しいかな。

E：　でも、感じとしては受験が入ってきたぐらいってことかな。

F：　確かにそれで言うと自分はジャズ好きなので、ジャズに関連してる人は大体流れてくるとフォローしちゃいますね。

大澤：　それはたぶん近いと思うからだよね、きっと。その集団の中では、SNS という世界の中では。

E：　それで言ったら、俺も好きなバンドの、その中でもちょっとコアな、例えば King Gnu で言ったら『Slumberland』ぐらい、そんな感じ。

若林：　僕は分かるけど、みんな大丈夫かな。

E：　何となく分かるじゃないですか。『白日』だけとかじゃないんだな、みたいな。みたいな感じで、そしたらフォローするかな。

大澤：　僕が当初思ってた仮説というのは、たぶん自分が勝手に引いた世界があって、その中で相対的に、自分でもう一個内側に、あの図（図 12）で言うところの内側の円みたいなものを、たぶん自分で引いてるんだよね。それがジャズ好きぐらいの境界のこともあれば、King Gnu が好きってだけじゃ駄目だと。『白日』とかって言ってるだけじゃ駄目で、もうちょっとコアなところじゃないとつながらない、みたいな。

E：　あと、『Prayer X』とか。

若林：　その輪っていうのは、そこでつながった人と学校の中での学級委員って同じ意味なのかな。

D：　線を引ける広さっていうか、例えば大学に行ったら、もちろん〔高校名〕出身って結構貴重な存在になるから、やっぱりそこに同じ属性の人を見つけた時の特別さって結構あると思うんですけど、逆に〔関連大学〕に行ったらわりといっぱいいるわけで。じゃあ、その中でそれが特別かっていうと、やっぱり〔高校名〕の中でも自分が特別だと思ってる人っていう風に、周りにどれだけ見つけられるかが線引きに関わるのかな、みたいな。

F：　確かに。（図 12 右 一番外の円の）大枠の広さ次第で。

大澤：　分かんないけど、X で引くその線と、インスタで引くその線と、リアルの生活の中で引くその線とって、たぶんみんなそれぞれちょっとずつ違うんだよね、きっと。

若林：　ジャズ好きな人とかが流れてきたら、あるいは King Gnu の中でも『白日』とかじゃなくてさ、みたいな人とかの輪って、つながった後、どうするんですか。それってやっぱり親近感があるから。

E：　親近感があるから話すようになりますよね、たぶん。

若林：　何ならサブアカに通すようにもなっていくかもしれない。さっきの思考実験的に。

E：　インスタとかは結構つながりやすいというか、開けやすいというか。なので、するかな。LINE はもうちょっと後かな。

若林：　LINE のほうが後？

E：　今の自分はそんな感じです。

F：　LINE って本当に連絡する人しか。

E：　もうちょっと知ってからのほうが連絡しやすいし。

若林：　ちなみに、そんな高校の中からさらに、さっき大澤さんの言った架空の話として「（高校を）出た後」を実際に経験したお 2 人的には、今、高校とか大学っていうコミュニティの輪以外のところに広がって、そこから生まれたコミュニティないしは関係性みたいなのは、先輩としての何かあったりします？

教員：　でも、B さんと A さんって結構違うかもしれないよね。

B：　確かにそうかもしれないですね。僕は高校が〔高校名〕だったので。

E：　そうなんだ。

B：　そうなんですよ。

C：　〔高校名〕。

B：　〔高校名〕だったので、高校から大学に上がってもそんなにコミュニティの広さっていうか、大学って言っても人多いよな、くらいにしか思ってなかったので。今も枠がめちゃくちゃ大きくなったような感覚はあんまりないんですけど、むしろ新しい活動とかに入ったほうが広がった気持ちはありますね。

若林：　意外とこの（図 12 右の）外の輪がでかくなっただけで、現実、例えば学校っていう場の中で、さらに例えば学級委員とか、もしかしたらここから先にはジャズみたいな話の輪の中で友達ができるけれど、大学に行ってもこの外側が広がるだけで、別に友達 100 人できるようにはならない。

B：　そんな感じです。知ってる人はちょっと増えるかもだけど、関係性はあんまり変わんないかな、みたいな。

F：　〔高校名〕的にはそうかな。

D：　そうだな。

E：　確かに。

若林：　どうですか。

A：　オンラインの話ですか。

若林：　いや、オンラインに限らず。高校っていう場所が生活のメインだったところから、大学っていう話になって。

A：　大学で新しく出会う、知り合う知り合い、友達を増やす時には、必要かどうかが大切なファクターになったような気がして、学科の人とは知り合ったほうが教えてもらえるから、あと何かあった時のためのつながりはあったほうがいい。

大澤：　それは覚えといたほうがいいよね。そもそも。

A：　あったほうがよくて、学科だと人数がこっちは少なかったから。ほかの文系の学部学科だとそういうことはあんまりないかもしれないけど、私の場合は母数が少なかったからつながり合うし、その中で親しくなる友達はもっと少なくなるかもしれないけど、取り

あえず最初の段階の知り合うっていう段階で言えば、その他大勢とはちょっと違う知り合いっていうのができて、授業を受けていく中で、たぶんその中でもっとちゃんとした友達ができる。知り合いと友達の違い。

あとは自分は〔大学のプログラム〕とか、他の友達がやってないことをやってたから、そこでさらに必要性が出てきて、同じ学科の中の知り合いだけじゃなくて、大学で他の文系の知り合いとか、教職でたまたま隣の席に座った人と「課題っていつまでですか」とかっていうやりとりのために知り合う。それは別に友達っていうか、知り合い。で、知り合って、その授業のためだけの知り合い。

B：　そのためだけの関係性みたいな。

A：　そう。でも、その授業の中ではお昼ご飯とかは食べに行くかもしれないけど、その時期のための知り合いが何人か発生したり。サークルも、私が所属してるから取りあえず知り合いになっとくかな、みたいな知り合いで、その中の友達っていうのはたぶん別にいて、みたいな。大学の中の知り合いの中の友達みたいなのがあるかなって思った。

B：　必要性と。

A：　そう。必要性で知り合いっていうのができて。

教員：　知り合いと友達はどう違うの？

A：　それは、知り合いは必要だから。友達は必要性以外にも、関わっていることの大切さっていうか、メリットを感じる。

若林：　たぶん大学っていう場所ができて、授業がいっぱいあって、知り合いと友達っていう輪が描けるようになるのか。知り合いと友達（の違い）って、自分の中でイメージはあります？　高校生の皆さん的に、今のお話を聞いて。例えばさっきの、学年に顔と名前は知ってるけれどもしゃべったことない、みたいな人って知り合いのイメージですか。それとも。

F：　知り合い。

D：　例えばさっきのインスタの話じゃないですけど、〔高校名〕だから本アカ通そうみたいな、わりとそういう基準の人は知り合いなのかなっていう。

F：　知り合い、確かに。

E：　確かに、確かに。

若林：　と、サブアカを通す（が別にある）。取りあえずお互いに〔高校名〕の人だからつながっておいて、投稿を一方的に見たりする関係の、知り合いの輪があるじゃないですか。そこの中で、たぶん今で言うと、例えば何かの委員会だとか、授業みたいな必然性があって、仲良くなった人の中に、気付いたらサブアカを通すような友達になっていて。じゃあサブアカを通してないけれどもしゃべったことあるみたいな人って、どういう扱い？扱いって言うと違うけれど。

D：　プリントを送ってもらうとか、学校生活で必要なことが多いかなっていう感じ。

B：　AI と変わんない。

若林：　AI と変わんないですか。あと 5 分ぐらいか。

大澤：　じゃあ、最後の質問になるかもしれないんだけど。今までの話で、有用性で判断する説がすごい盛り上がってきたところで。逆の質問なんだけど、あえて有用性を感じないような人とやっぱり出会う、みたいなムーブをみんなが経験したことがあるのかとか、必要だと思うのかとか、そういうことが我々としては気になっていて。規範的には大事だと思うんですよ。全然知らない人と知り合ってみる、自分とは考えが違う人の考えを聞いてみるって、言葉だけ聞いたら大事そうな感じがするじゃない？　道徳の授業とかで言われたら、そうかなと思う気がするでしょ。

若林：　いろんな意見の人がいるんだよ、っていう。

大澤：　でも、実際にそれをやるかどうかっていうのはやっぱり分からないなと思ってて。2 つ質問ね。そういう有用性とかは関係なく、とにかく自分とは異質な、異なる考えを持ってそうな人とつながるみたいな。

若林：　なんでこんな人と、関係もないし、別に仲良くなろうとも思わない人と出会ってしまうみたいなこと。

大澤：　出会いに行くみたいなことをやったことがあるかっていうことと、そういうのが偶発的に起きた時でもいいんだけど、大事だと思ったのかどうか、みたいなのは最後の質問として、どうですかね。

若林：　出会いに行ったじゃなくて、出会ったっていう経験が思い浮かぶか。

F：　今日、すごい話してて、自分と D は感覚が似てるけど、C と A さんは違うなと思うのが、もうお二方は目的があって、その目的を果たすための手段として会話を使ってるけど、自分とか D は話すことのために話してるみたいな、話すことを楽しんでるから、

そこがすごい差を感じてます。

Ｅ：　楽しんでないって言われた。

Ｃ：　楽しめなかったか。

若林：　逆に、「しゃべりたくもないわ」みたいに結果的に思った人と関わった、みたいなことってあります？　そういう意味では。しゃべりたいからしゃべるって、誰とでもそれはそうですか。仲いい友達に限らず。

Ｆ：　そうですね。

Ｃ：　すげえな。

Ｅ：　すげえな。

若林：　すげえなって思う？　逆の経験はあります？

Ｆ：　しゃべりたくない？

Ｃ：　しゃべりたくない人としゃべる必要はないかな、みたいな。

若林：　そうなんだけれど、そういうことが起きてしまったことがあるか。

Ｃ：　いや、ほとんどないです。

Ａ：　それは必要性に関わってくる気がする。

Ｅ：　ないな。避けてるか。

Ｃ：　しゃべる必要があるっていうか、一緒の空間をともにするにあたって、ある程度、仲良くなってたほうが今後いいかな、みたいな。例えばバイト先とか、全然知らないよりは、多少のコミュニケーションを取っといたほうが今後やっていく上でいいかな、みたいなところで話して、自分とは異なる価値観の人がつながるかなっていうのはあるけど、自分から意思を持ってつながりに行くっていうのはないかなっていう感じですね。

若林：　言ったら、例えばバイト先っていうような付き合わざるを得ないような状況だったら「すごい嫌だなこの人、絶対ドアも閉めないしさ」みたいな、もしかしたらあまりにも自分と仲良くなれなさそうな人でも、別にしゃべらないなんていうことはしないけれども、別にそういう人としゃべりたいかというと、そんなことはない。っていうのと、それもそれとして、しゃべるっていうこと自体が目的っていう話をさっきしてくれたみたいな。

やっぱり見方が（違う）。

A：　それで言うと、価値観が違う人とかは、新しい見方を私に、関わることで得ることができるから、それが目的になる。

F：　それは会話に目的があるという。

A：　そう。目的を持たないと別にぼけっとしてればいいから。あとは、関わりにくい人とかも同じで、次に同じようなタイプの人と関わらないといけなくなった時のための練習。

D：　向上心が。

A：　バイトとかはたぶんそう。バイトって今後一生続けてるわけじゃないから、次のための練習。

若林：　好き好んで出会いたくはないけど、出会ってしまうだろう、人生はどうせ、みたいな。出会わずに済むなら出会いたくないですか。そんなに？　どうですか。これ、最後にしましょう。

E：　出会えるんだったら出会いたくない？

C：　出会うのは全然。嫌ではない。

E：　別にね。タダだし。

C：　ただ、その後どうするかはちょっと変わってくるかな、みたいな。

若林：　（図 12 右の）円の外側に行くのか、内側に行くのか。こっちにやるのか、こっちにやるのかは後だけど、出会ってみるのはいいかもなっていう。

F：　自分は帰り道の電車でいつも基本、スマホ見てるんですけど、充電ない時とか、本当に暇な時は、もうその辺の人にたまに話しかけるんですよ。音楽の本を読んでる人に、音楽好きなんですかとか、タンクトップムキムキの人に何かスポーツやってるんですかとか、そういうのは確かにあるかもしれない。

大澤：　あるかもしれないって言うけど、たぶんないよね。

B：　なさそう。

若林：　という感じで、ちょうど 3 時になってしまう。こんな感じで皆さんがいろんな人と出会って、関係性っていうのをどうやって構築していくのか。仲良くなるとか、人と出会う

っていうことを考えるために、SNS っていうのが人と関わることの一個の足場の題材になってるかなというので、架空SNSを題材にこういうお話を皆さんとお話しました。皆さんのいろんな考えが聞けて、とても勉強になりましたし、楽しかったです。ここまででワークショップは以上となります。本当にありがとうございました。

4. おわりに

本稿はデジタルネイティブ世代のソーシャルメディア利用を通したオンライン・オフライン空間でのコミュニケーション様式について、特に関係性に応じたコミュニケーションの“使い分け”や関係性の構築・変容について洞察することを目的として、高校生を対象に行ったワークショップの実践内容を記録した。

ワークショップ実践の観点では、“架空の SNS アプリ”を用いて実際のオンライン上での関係性を再現する試みは、例えばディスカッションのパートで「書いていなかったけれどこういうものもあった」という発話が引き出され、むしろそれぞれの個人的な文脈は対話の中でこそ語られた。そのため、参加者らの実際の関係性をリアルに書き出す仕掛けとしては検討の余地が残る。一方で、他者との用法やその背景にある文脈を交換し、自らの内省を引き出すきっかけのツールとしては機能したと考えている。特にソーシャルメディア利用という題材は「誰もが親しんでいるが実は異なる用法や意味づけをしているもの」であるゆえに、参加者同士が「自分との違い」を発見して驚いたり、自分の用法や価値観がどのように違うのかを語る場面も多く見られた。

調査の観点では、筆者らの持っていた「高校生らは既にオンラインコミュニケーションに伴う社会的手がかりの断片化などの特性やそれがもたらすリスクに適応しており、むしろ関係性に応じて“使い分け”を行っている」という関心の具体的な在り方として、例えば以下のような論点が語られた。

- ソーシャルメディアのアカウントを複数持つことやコミュニケーションに用いる機能を選ぶなど、関係性に応じた“使い分け”は確かに行っている
- オフラインの生活圏で強制的に出会いうる範囲の、かつ関わることに目的がある他者を「知り合い」として、弱い関係性を広く構築している
- オフラインで強制的に出会いうる範囲の外の他者については、例えば限られた趣味の共有など、オフラインで出会う他者で達成されない目的がある場合につながる

このような姿からは、少なくとも『デジタルネイティブ世代はソーシャルメディアで多くのことを共有していたり、オンラインで知らない他者とつながったりすることに積極的である』という姿とは異なる印象を持つのではないだろうか。むしろ他者との出会いやつながりの範囲を制御できるようになったからこそ、リスクの伴う出会い、さらにはベネフィットが明確でない出会いを避けた上での他者との関係性の輪を構築できるのかもしれない。これらの論点を含め、対話内容に関する分析や詳細な議論は別稿にて報告する。

謝辞

本稿の作成は、公益財団法人トヨタ財団 特定課題プログラム「先端技術と共創する新たな人間社会」「ソーシャルメディア空間がもたらす“かかわりの全体性”の希薄化に関する研究」（研究代表者：若林魁人）の一環として行った。また調査の実施にあたっては、筆者らの知人である高校教員に多大な協力を得た。これらについて、記して感謝する。

ELSI NOTE No. 61 令和 7 年 9 月 19 日

ソーシャルメディア利用とコミュニケーション：架空のアプリを用いたワークショップの実施記録

若林 魁人　大阪大学 社会技術共創研究センター　特任研究員　（2025 年 8 月現在）
大澤 康太郎　名古屋大学 大学院環境学研究科　博士後期課程　（2025 年 8 月現在）

Social Media and Communication: Event Report of workshop with high school students

Kaito Wakabayashi　Research Center on Ethical, Legal and Social Issues, The University of Osaka
Kotaro Osawa　Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

大阪大学 社会技術共創研究センター
Research Center on Ethical, Legal and Social Issues

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-8
大阪大学吹田キャンパステクノアライアンス C 棟 6 階
TEL 06-6105-6084
https://elsi.osaka-u.ac.jp

大阪大学

ELSI